令和５年度

第１回　富士特別支援学校富士東分校学校運営協議会（報告）

１　日　時　　令和５年６月 26 日（月）午前 10 時から正午まで

２　参加者

⑴　学校運営協議会委員（敬称略）

上村　一成（元特別支援学校長　現：教職員サポートルーム相談員）
鈴木　修　（特定非営利活動法人くらしえん・しごとえん　代表理事）
船津　裕子（船津クリニック　薬剤師）
佐野　勝　（青葉台町内連合会　連合自治会長）
伊藤　直美（富士東高等学校　副校長）
髙橋　美喜（富　士　東　分　校　ＰＴＡ会長）

⑵　教職員

山﨑　勝之（副 校 長）
岩附　敦史（部 主 事）
杉澤　陵太（教務課長）

３　次　第

⑴　副校長あいさつ
⑵　任命書交付
⑶　学校運営協議会について（説明）
⑷　会長、副会長の選任
⑸　校内参観
⑹　議事
　ア　令和５年度　学校経営計画の承認
　イ　協議、質疑応答
　　・「富士東分校だからこそ育てられる力」について
⑺　コンプライアンス委員会

【議事録】

１　副校長あいさつ

- 開校から２か月半が経過した。生徒たちは安定した生活を送っている。
- 今年度は１年生 15 人だけの小集団であることから、富士東高校の力をお借りしたり、同じ地域にある富士特別支援学校本校、富士宮分校とスクラムを組んで取り組んだりする中で、生徒はもちろん教職員も大きな刺激を受けている。
- よりリアルな社会との「つながり合い」を体感して、社会へと送り出せる仕組み作りが喫緊の課題だと感じている。
  地域や関係者の皆様に支えていただくだけではなく、支え合える富士東分校を目指していきたい。後半の協議では支え合いに向けた仕組み作りについて、ご助言をいただきたい。

２　任命書交付

- 各委員に副校長より交付

３　自己紹介

- 上村委員　昨年度は富士宮分校副校長として、富士東分校の設置準備に関わった。これまでの経験を活かしながら、富士東分校を創り上げていくことに携わっていきたい。
- 鈴木委員　ジョブコーチとして卒業生のサポートを行っている。卒業後の姿を描きながら情報を発信していきたい。
- 船津委員　性教育やケーススタディを通して、人との違いを認め合うことや自尊心、自己決定権の尊さについて生徒に伝えられるような関わりをもっていきたい。
- 佐野委員　青葉台地区として富士東分校とどのように関わっていけばよいか考えていきたい。また、地区の皆さんに富士東分校を積極的にアピールしていきたい。
- 伊藤委員　「共生・共育」というキーワードを支えにしながら、富士東分校生と富士東高生が共に成長していきたい。
- 髙橋委員　分校生が高等学校の文化祭や体育祭へ参加した。生徒たちは同じ時代を生きて、青春していることを実感できた。

４　学校運営協議会について

- 「静岡県立高校・特別支援学校における学校運営協議会制度（コミュニティ・スクール）導入の手引き」〈概要版〉をもとに、副校長より説明した。

５　会長、副会長の選任

・　会　長：上村　一成　様
・　副会長：鈴木　修　　様　　承認

６　校内参観

・　校内実習初日

７　議　事

【 学校経営計画について 】

・　Ｂ 委 員　学校経営計画書の成果目標について、私自身数値とかはあまり賛成ではないが、できた・できなかったの基準はどのようにしていくか。
・　副 校 長　県の方針で成果目標に数値を書き込んでいない。評価の段階では５段階くらいの尺度で、達成の基準は目標にもよるが７割から８割のラインで見ていきたい。
・　Ｂ 委 員　その際何を基準にするか、共通のものや具体的な目標が今後できてくるとよい。
・　Ａ 委 員　生徒用の学校経営計画書は、どのような場面や意図で伝えたのか。
・　教務課長　学年集会の中で、生徒たちも先生や保護者と力を合わせて学校創りに関わっていかないかと提案した。
・　Ａ 委 員　学校という組織は、もともと決まっているところに生徒が入る形になっている。それでは生徒の主体的なものが削がれることもある。最初に、自分たちで分校を創っていこうと意識できたことはよいスタートになる。今後、計画に出てくる難しい言葉が、生徒自身にもよく分かる言葉になるとよい。
・　学校経営計画　承認

【 富士東分校だからこそ育てられる力について 】（司会：Ａ委員）

・　副 校 長　富士東高校との共生・共育の取組に関して、次の３点を紹介
　○ 共生・共育委員、共生・共育委員長の言葉
　（議事録と共に添付）
　○ 東雲祭（文化の部）富士東高校生対象のアンケート結果
　○ 東雲祭（文化の部）富士東分校生対象のアンケート結果
・　Ａ 委 員　１期生が３年後に卒業してから、また 20 歳になったときに、「富士東分校に来てよかった、学んで良かった」と思える学校創りが大事である。学校運営協議会が、そのヒントや支えになれるといい。まずは、校内参観や生徒の様子からの感想、感じたことを伝え合い、そこから「富士東分校だからこそ育てられる力」のヒントを見つけていきたい。

・　Ｃ 委 員　東雲祭の写真を拝見したり、アンケート等の説明を聞いたりする中で、富士東高校の生徒と富士東分校の生徒が一緒に過ごす空間や共有する時間が実現されていると感じた。
自己決定権が学校目標にも掲げられていることも素晴らしいと思う。アンケート結果については忖度せずに公表するとよい。問題や課題にこそチャンスがたくさん埋まっている。
その意見は氷山の一角で、根底にあるものを最初に突き詰めていけば、一気に様々な問題を解決できることもある。いいことよりも悪いことをすくい上げてほしい。
船津クリニックは開かれたクリニックを目指しているので、先生たちも、様々な場面で積極的に協力を要請してほしい。富士東分校に協力していきたい。

・　副 校 長　アンケート結果を見て、学校側としても良い評価が大部分を占めていることにＣ委員と同じ感覚を持っている。悪い言葉や意見はなかなか表面にでてこない。埋もれている思いや言葉をいかにして引き出していくかが大きな課題である。

・　Ｃ 委 員　クリニックの相談室では本音が出る。学校では「優等生」である子が、たくさん悩みを抱えている。そこを拾い上げるのが私たちの役目でもある。特別支援学校の生徒は、真っ直ぐに活き活きと本音を伝えられることがある。それを定型発達の子たちが受け取ってくれたら、よい影響を受けるのではないかと感じる。

・　Ａ 委 員　そういった自然なかかわりが、共生・共育の一つの視点になるのではないか。

・　Ｆ 委 員　学校生活の中では様々な手段や関係性があって、実現できることとできないことがある。例えば富士東高校の部活動への分校生の参加についても、分校の教員が付き添うのではなく地区の協力を得るなど、これからできることについて考えていってほしい。好きなことや共通の活動を通して、更に高校生同士としての自然なつながりをもってほしい。中学校の部活では、同じ空間に仲間がいたことで、とても良い影響を受けた。子どもたちには今しかない青春時代を感じてほしい。

・　Ａ 委 員　「青春時代」も今回の協議のキーワードとなる。生徒同士が共通のものに向かって一緒に行動できることは大事である。
やりたい気持ちと現状を擦り合わせて調整していけるとよい。

・　Ｅ 委 員　今日の校内作業の授業を見て、分校生は自分たちが社会の役に立っていることを実感する場であったと感じた。分校で行われている作業学習は、社会とのつながりを垣間見ることができるという点で、富士東高校の生徒・教職員にとっても大きなメリットがある。
両校は、軒を連ねて生活する環境にあり、肌で感じられるものが多い。その点で考えると、富士東分校だからこそできることは漠然としているが「絶対にある」と感じている。今後もやりとりを重ねながら模索していきたい。

・　Ａ 委 員　軒を連ねる、日常的に声が聞こえ、関わることができる環境は分校と高校の普通教室が廊下でつながっている、富士東分校ならではの設置形態である。

・　Ｄ 委 員　富士東高校の共生・共育委員長である久保田さんの言葉や様子から、富士東高校生が気持ちよく分校の生徒を迎えていることがよくわかった。生徒の中には、当初は不安をもった生徒もいただろうが、そこを富士東高校の先生と生徒で上手に受け止めていった。
同じ校舎の中で、廊下に境界となる線があるわけではない。素晴らしいことが始まったと実感している。地域としても分校との結びつきを、これから地区の役員と考えていきたい。青葉台地区の定例会の中でも富士東分校に関する情報を発信していきたい。そして、富士東分校の生徒と地区の住民が関われる方法を模索していきたい。例えば地区の文化祭のステージ発表や展示部門への参加も考えられる。

・　Ａ 委 員　高等部分校だからこそ、地域とのつながりはより一層必要なことである。今現在、富士東分校でそういった具体的な取組の予定はあるか。

・　副 校 長　現在のところ具体的な計画はない。富士宮分校の先行例からみれば、地域の公民館に出向いて作業の取組を生かした清掃活動を展開できるかもしれない。また文化祭のステージ発表等で自信をつけた生徒たちの気持ちの高まりを見ていると、来年の文化祭まで待つ必要はない。地区の文化祭にも参加できるのではないか。

・　Ｄ 委 員　ぜひ積極的に参加してほしい。私と文化祭担当者とでの分校訪問もお願いしたい。

＜この協議が行われた翌日のこと・・・嬉しいお知らせが＞
・早速、Ｄ委員が地区文化祭の担当者２名と共に来校され、ステージ出演や展示出店に向けた具体的な説明をいただきました。
・その後、全職員で協議し、11 月 12 日（日）の青葉台地区文化祭に参加することが決定。

・　Ｅ 委 員　共生・共育委員長である久保田さんのメッセージ（２回の代表挨拶）について富士東高校の教員は誰も指導していない。その場で聞いていた高校の教員もその内容に驚いた。このメッセージは彼女から自然に出てきた言葉。
一方で、先程Ｆ委員からご指摘を受けた、「話しかければ応対できる」は、富士東高生の気質だと感じる。思っていることを自分からアウトプットしない生徒が多い。その富士東高生の全体の気質の中で、自分の思いを上手にアウトプットできる久保田さんの力は大きかった。彼女がアウトプットできたことで、「ああそうだな」と気づく東高生も多い。きっかけを作ってくれた。分校ができたことで、富士東校生も成長させてもらっている。

・　Ａ 委 員　きっかけひとつで、がらっと変わることがある。「空気感」という、高校生らしい言葉も生まれた。共生・共育も柱にしていくものであり、今後具体的に、何を行っていくかを考えたい。

・　Ｂ 委 員　障害のある子どもたちが、この学校の中で行っている学習や活動は非常に大切である。
一方で、実際の社会は厳しいという現実もある。学校現場は「指導」であり、雇用現場は労働「契約」の世界、大きな分岐点となる。現場は必死で、従業員は余裕がない社会で働いている場合が多い。雇用現場での配慮とか気遣いや共生は、学校と距離がある。だから働く中での問題が増えているのも事実である。
そう考えた時、違和感をすくい上げていくことが大切である。違和感は黙っていると溜まっていき、問題となる。
障害のある人本人も声にしていくことはもちろんだが、周りの人たちが「あれっ」と思うことをどうすくい上げていくかが大切。
違和感や困ったことがあって当たり前。たくさん困っていい、たくさん失敗していい、悩んでいい。うまくいかないことがとても大切だということを伝えていってほしい。
特別支援学校の教員や生徒を対象に、定期的に学習会を行ってもよいのではないか。例えば職場実習の前に、実際の雇用現場の様子や支援をした社会人の事例などの学習会を設定する。先生たちには、是非、こういうことできないかと提案や依頼をしてほしい。富士東分校とでもオンラインで実施することは十分可能ではないか。

・　Ｅ 委 員　違和感は大事。富士東高校生と分校生それぞれが感じる違和感を擦り合わせながら、次につながる大事な力が育っていくのではないか。共生・共育はいい言葉で、つい枠の中に「そうしなければ」と思ってしまうが、違った視点で本当の共

生・共育をつくっていけるとよい。
本会ですごくいい縁をいただいた。富士東分校にとっても次のステップにつながるものになった。そして、すぐにでも行動していってほしい。

８　コンプライアンス委員会

⑴　取組状況の説明（副校長）

・不祥事根絶に向けた取組
・本校の感染症対策

⑵　意見聴取

・　Ａ 委 員　教員の負担感が不祥事へとつながるケースが多い。業務量が減っていないのに、勤務時間を指摘されるのでは、現場は困惑する。開校初年度だからこそ、様々な業務をコンパクトに整理していくべき。
・　Ｃ 委 員　自身が関わる相談（富士東分校ではない）の中で先生方が疲弊している状況が見受けられる。不祥事をおこした人を責められない。それぞれの背景がある。睡眠時間はきちんととってほしい。業務が重なることを避け、負担を減らしてコンパクトにする。それは生徒主体の学校創りにもつながる。
・　Ｂ 委 員　学校は豊かな心を育む場である。関わる人間が豊かでなければ絶対に難しい。そのためにも地域や学校外組織の力を借りていってほしい。できないことをできないとはっきり言う。先生方が健康でなければならない。
・　副 校 長　「スクラム」という言葉を用いて、富士宮分校と交流や支え合う活動に取り組んでいる。教職員間でも「スクラム」を組み、互いに支え合い、生徒や学校に関わってくださる皆様に豊かさを届けられる集団でありたい。

＊ 第２回学校運営協議会は、令和５年 10 月 20 日（金）に開催の予定

令和５年度

第２回　富士特別支援学校富士東分校学校運営協議会（報告）

１　日　時　　令和５年 10 月 20 日（金）午前 10 時から正午まで

２　参加者

⑴　学校運営協議会委員（敬称略）

上村　一成（元特別支援学校長　現：教職員サポートルーム相談員）
鈴木　修　（特定非営利活動法人くらしえん・しごとえん　代表理事）
船津　裕子（船津クリニック　薬剤師）
佐野　勝　（青葉台町内連合会　連合自治会長）
伊藤　直美（富士東高等学校　副校長）
髙橋　美喜（富　士　東　分　校　ＰＴＡ会長）

⑵　教職員

山﨑　勝之（副 校 長）
岩附　敦史（部 主 事）
杉澤　陵太（教務課長）

３　次　第

⑴　副校長あいさつ
⑵　議事
　ア　報告
　　・前期の取組
　　・校内参観（VTR）
　　・前期学校自己評価
　イ　協議、質疑応答
　　・「評価結果に基づく後期の課題と取組について」
　　・「地域と分校がつながり合い、分かち合う関係を築くために」
⑶　コンプライアンス委員会

【議事録】

１　副校長あいさつ

・　開校から７か月、生徒たちは富士東高校、富士宮分校、地域の皆様の後押しをいただきながら着実に成長を遂げている。
・　今週は第２回目となる校内実習を終えたところ。委託された仕事に責任を持ち最後までやり遂げたい、という生徒の姿が見られ、実習報告会では全員が達成感を感じていた。また、土日をはさむ形の実習から新たな課題も見えてきた。９月から地域の事業所等での作業学習が始まった。今後も校外で学ぶ機会を充実させて、地域と富士東分校が「つながり合い、分かち合う関係」を築いていきたい。

２　議事

【 前期の取組 】（高等部主事）

・１学期は学校を創り上げるために、日々奮闘する毎日だった。生徒たちは行事を乗り越えていく度に、中学生から高校生へ成長していったように思える。
６月の東雲祭（文化祭）のオープニングステージは、富士東分校と富士東高校が初めて一体になった瞬間であった。共生・共育の取組はランチ交流に始まり２学期は互いの学校の様子を紹介し合うラジオ放送（昼休みの放送）へと発展している。
・富士宮分校との交流学習「SCRUM すくらむ」は、実際に富士宮分校を訪問したり、Zoom で互いの様子を知り合ったりする機会となっており、これまで４回にわたり実施している。
・２学期は「地域に打って出る」がテーマ。地域作業では週に１回、４事業所での活動を行っている。（デイサービスセンターふじみ台：介護、東名電機：製造、富士きのこセンター：食品製造、ウエルシア富士木宮店：小売り・接客）
それぞれの地域作業先で担当する方々に教わり関わりながら活動できている。
マリンスイーパーの土井様との交流学習は、２学期も継続中であり、生徒たちは予想以上の意欲を示して取り組んでいる。
・生徒は自分たちの取組を節目毎に動画で振り返っている。次に紹介する前期の取組 VTR はそんな生徒たちの活動のダイジェスト版になる。

【 校内参観にかえてＶＴＲ視聴 】

・　地域作業で生徒不在のため

【 前期学校自己評価 】（副校長）

・令和５年度　富士東分校　前期学校自己評価を報告。

【 評価結果に基づく後期の課題と取組について 】　（司会：Ａ委員）

緊急事態に備えた新たな訓練の実施を

・Ａ委員　15 人の生徒が、たった 7 か月の間に富士東高校の生徒、富士宮分校の生徒、地域の人…これだけの人に出会ったのはすごいことで、だからこそ富士東分校の生徒が成長したと思う。それは先生方の支えがあったからこそ。とても一体感を感じた。学校評価も丁寧に分かりやすくまとめられている。AED は体育など運動場でも緊急対応できるよう自由に持ち運べるものがあるとよい。パルスオキシメーターも先生方が簡単に使用でき有用である。緊急搬送訓練については、搬送者が同時に複数出た場面を想定した訓練も今から実施しておくとよい。

・副校長　1 学期から体育の時間は AED を持参しておりそれを継続する。先日、富士消防署の協力を得て、富士東高校の教職員と合同の救命救急訓練を行った。内容は AED の扱い方と心臓マッサージの実技。AED は両校で共有しており、全教職員で設置場所も確認している。

・Ａ委員　AED については生徒も AED 使用の訓練を行うとよい。生徒が実際に使用することはないかもしれないが、その場に居合わせた時の対応など生徒なりの協力の仕方があり、実施することで意識向上につながる。

学校は外の力を借りる姿勢を大切に

・Ｂ委員　ＶＴＲを見て生徒がたくさんの人に出会った経験、先生方の準備も含めて、まさに突っ走ってきたんだなという印象を受けた。学校は地域をはじめ、外の力を借りる姿勢を大切にしてほしい。私は現在、放課後の時間に先生方向けの勉強会を実施している。内容は職場実習に臨む際の不安解消方法、教員が実際の巡回に出向いた時の生徒や職場を見る視点など。作業学習では生徒の身体の使い方や作業環境のアドバイスもできる。外の力の借り方がうまい先生になってほしい。

地域への発信が理解促進につながる

・Ｃ委員　学校が始まってから、先生方、子どもたちの充実している様子が感じられた。特に、学校経営の中に「主体者」「自立活動」が文字として入っていることが非常によい。特定の生徒の精神状態に他の生徒も引っ張られ影響を受けることは往々にしてある。養護教諭も対応していると伺ったが、私でよければ養護教諭と一緒に生徒に関わっていきたい。生徒には複数のカウンセラーがいた方がよい。前期の学校生活の充実ぶりは少人数であるかるからこそ素晴らしい取組が可能であったと思う。今後人数が増えていく中で、今の良さをどう継続させていくかを考えたい。富士東分校の姿や実践を発信することで、一般の人の

考えが変わってくる。これ以上の取組は負担になってしまうかもしれないが他の地域へも発信していくことが、一般の人の理解促進や垣根を越えていくことにつながると思う。

地区文化祭をきっかけに地区とのつながりを

・Ｄ委員　青葉台地区の文化祭は４年ぶりの開催となる。４年前と比べると出店数、ステージの出演数ともに減少している。第１回の学校運営協議会で文化祭への富士東分校の参加を提案した。その後、ステージ発表、作業製品の販売、美術作品の展示、総合司会などをやってもらえることになり、素晴らしいことだと感じている。分校が文化祭に参加することで、地区が富士東分校を知る機会になることを期待している。
来年度以降も、５月の子ども祭りや地区祭りなどの機会に富士東分校が地区とつながり、地区の行事が賑やかになってほしい。

共生により高校生が潜在的に持っていたものが引き出されている

・Ｅ委員　先程の動画に感動した。学校自己評価の自由記述欄に「毎日楽しく仕事ができている」「気軽に話せる雰囲気が良い」という記述がある。そう感じる先生だからこそ、教育的な愛情が生徒たちに伝わり、生徒の表情に出ているのだと思う。そんな姿に感動した。
学校自己評価の「交流活動」に関係する、１学期のランチ交流、２学期から始まった昼のラジオ番組は、いずれも生徒からの発案で、教員が働きかけたわけではない。それがとてもよかった。
富士東高校の職業講話では、富士東分校の教諭が講師となり、将来教員を目指す生徒に講義をしていただいた。富士東高生が特別支援学校の先生の仕事を間近に見る非常に良い機会となった。アート交流をはじめ、校舎内で様々なものに触れる機会がたくさんある。そういったことから富士東高校生が育っている。高校生の中に、もともと潜在的にあったものが、共生が始まったことによって引き出されているところがたくさんある。それが非常にありがたい。先ほどの動画を富士東高生にも見せたい。富士東分校の地域との交流や活動をまだまだ知らないので、それらを知ることが富士東高生のキャリア教育にもつながる。そのような機会をいただけたらありがたい。
交流という視点からいえば、もっと様々な可能性を模索中。例えば遠足や修学旅行なども分校と合同で実施できないか。たとえ実現できなかったとしても、可能性を探り、検討したいと思っている。

・副校長　職業講話を受けた富士東高生の感想を読んで、両校の生徒は互いの授業中の姿を案外知らないことを再認識した。職業講話のなかに富士東高生が分校の授業を参観する機会を設定したことも新たな気づきへとつながったように感じた。富士東校新聞の最新号の一面には、富士東分校の密着記事があり、保健指導の様子や写真が載っている。これま

でも繰り返し分校を取材した記事が掲載されており、互いの活動を知り合うツールになっている。

障害者雇用の現場や変容を知ることが大事

・Ｂ委員　私が普段関わっている障害者雇用の現場は、共生とは程遠い、むしろ差別や偏見にさらされるところがある。環境が変わっていかなければならない。最近は、障害者雇用代行ビジネスが横行し、分断が起こっていることもある。その意味で、どうやって受け入れていくかを一緒になって考え、過ごしていく中で、違和感や、疑問に思うことがものすごく大事である。そういった場面での生徒たちの気づきや変化を大切にしてほしいし、私にも教えてほしい。そして、若い世代の柔軟な考え方を地域に発信してほしい。

・副校長　共生をとおしての学びは、触れ合ってすぐ気づく人もいれば、歳を重ねてから実感する人もいるだろう。それぞれが何かしらの気づきを得て、将来につなげてほしい。

生徒と先生たちとの信頼関係がありがたい

・Ｆ委員　先生たちと話したことを家庭でも話すことが増え、最近は将来の夢や希望が話題にあがるようになった。以前はパソコンを扱う仕事を希望していた。それに向け、富士東校生のように英語の勉強をして英検のテキストをやったり、パソコンの変換がうまくできるよう漢字の勉強にも取り組んだりしている。夏休みは放デイ等でも努力していた。
子どもはどこまでできて、どこからできないか、家庭としても迷うところもあり、悩みでもある。青葉台地区文化祭についても、新しい環境や場、ステージ発表への不安を話すこともある。ただ、卒業後社会に出ていくことを考えると、できることをしていってほしいと思う。
高校生活の時間は貴重だ。高校生活の良い思い出や充実した時間が、社会へ踏み出す力となる。体育祭のように、今後も富士東高校生と一緒に行う行事があれば、それが目標となり、様々なことにもチャレンジできると思う。部活動も最初の回数よりも多く設定され、本人は活き活きとしている。剣道部顧問からの厚意も大変ありがたい。共生・共育という意味では、同世代の仲間と、当たり前に過ごすことができる環境がすごくいいと改めて感じている。生徒と先生たちとの信頼関係ができている。先生たちは批判を一切せずに、生身の状態で受け入れてくれていることが、私たち親にとっては非常にありがたい。良きパートナーとして歩んでくれている。

・副会長　議題にあるコンプライアンス委員会の内容にもなるが、Ｆ委員からのお言葉はありがたい。そう思ってくださっている保護者の期待を裏切らない教師集団でありたい。富士東校生は、富士東分校の生徒だけでなく教師の姿も日頃から見ている。特別支援学校教員を目指している生徒もいると聞いている。そんな生徒たちが卒業時にも、同じ気持ちを持ち続けてくれるような働き方を姿で示していきたい。

【 地域と分校がつながり合い、分かち合う関係を築くために 】

・取組の概要説明

＜地域作業＞
９月から３月まで４つの事業所で計 14 回実施する。

＜職場見学＞　富士地区の地場産業を学習
（株）ジヤトコ、大日製紙（株）、蛙屋（紙バンド販売）、四季彩堂（和雑貨販売）

＜青葉台地区文化祭＞
発表、販売、展示等に加え、メンテナンス班は清掃活動も行う予定

＜マリンスイープ作業＞
今後は再生ルアーの絵付けのワークショップを実施する予定。製品化やこの取組をツールとした交流の拡張を検討中。

＜富士東高校との共生・共育＞
ラジオ放送：今後月１回、毎回パーソナリティとなる両校の生徒が交代で出演しトークを繰りひろげている。
球 技 大 会：男女ともサッカーに出場
芸術鑑賞会：富士東高校と合同でロゼシアターにて狂言の鑑賞

＜富士宮分校との交流＞
富士宮分校の上級生からは刺激を受け、同級生とは切磋琢磨する姿勢が見られる。今後も「SCRUM すくらむ」を継続していく。

・副校長　こういった多様な取組を進める上で、先生方の業務の負担が心配になるが、９月までの残業時間の月平均は 19 時間である。これだけの学習ができるのは、この規模の分校だからこそだと思う。来年度以降は生徒数も増え、現在の業務形態では対応できないケースも出てくるであろう。学年やクラス数が増えても、授業の準備時間を確保できるよう業務改善を継続したい。

どこに、なにをもって地域に打って出るか

・Ａ委員　第１回の学校運営協議会の時と比べて、学校が動き出し、立ち上がっていく姿を肌で感じる。その中で「地域とのつながりを大切にする」「地域に打って出る」という力強いキーワードのもと、「どこに」「なにをもって」打って出るか、更によい活動になるよう、ここから協議を進めていく。

・副校長　学校の立ち上げも落ち着き、未着手となっていた特別支援学校のセンター的役割が動き出した。まずは学校紹介便り「East Blue」の発行から取り組む。富士市、富士宮市の小・中学校、教育委員会等の関係機関をコーディネーターが訪問し、言葉を交わしながら配布していく。

・Ａ委員　富士東分校の地域作業の様子を偶然見かけた。ドラッグストアで商品の陳列をしていた３人の男子生徒は、楽しそうに活き活きと働いていた。地域の中で子どもたちが活躍する姿は大切にしていきたい。

地域とのつながりを深めるために

・Ｆ委員　East Blue は学校関係のみの発行か。地域ベースで広げていくのか。

・部主事　青葉台地区まちづくりセンターへの配布や回覧板等での地域住民への周知も考えている。

・副校長　もともとは学校支援が主目的であるが、それに加えて地域の方々や、富士東高校の保護者への配布も考えている。

・Ｆ委員　配布先の別案として、私自身、自立支援協議会や地域の部会に所属しているが、そちらに発信していくことはできるか。先日、新聞社との打ち合わせがあった。そこでも富士東分校に通っていることも話題にあげた。そういった形で、発信する機会にこのようなものを活用できるといい。先日、沼津で PTA の会合があり分校 PTA の運営の課題も挙げられた。今後の富士東高校 PTA との活動も含め、どう組織化していくかを考えていきたい。

・Ａ委員　先ほどの動画の中で、生徒が商店街の方々に名刺を渡すシーンがあった。ああいう形で、地域とつながる機会や物が広がっていくとよい。

社会とつながる、その積み重ねが壁をなくすことに

・Ｂ委員　卒業生が就労で苦労していることは多々あり、私自身強く実感している。だからこそ、地域とつながっていくことがとても大切。ジェンダー、LGBTQ が理解されていない様子を見た卒業生が、自分のことでなくても、自分も差別されるのではと息苦しく感じているケースもある。他にも、頑張れ、頑張れと職場で声をかけてもらえることをプレッシャーに感じて悩みとなっているケースもある。学校にいる間は、少人数で、しかも富士東分校は教員間の協力体制もあり、ストレスのない環境である。これは素晴らしい環境である。その一方で、卒業後を考えると、特別支援学校の生徒は卒業後すぐに就労がある。そこにワンクッションあればいいのだが、そのギャップが不安になる。現場では心無い言葉を浴びることもある。特別支援学校の時の楽しい思い出を頼りに生きている子もいる。だからこそ、社会との共生、社会とつながっていかなければならない。その積み重ねが壁をなくしていくと信じている。特別支援学校の教員を目指している大学生とつながりがある。その子にも富士東分校のことを話していきたい。「広く伝えていく」ことが大切ではないか。

・副校長　自戒を込めて言うと、特別支援学校の中はユートピアなような一面もある。成功体験を大切にしながらも、職場実習や地域作業などをとおして、主体者として課題をクリアしていける力を育てたい。

「卒業後はどうだろう」という意識をもつ

・Ｂ委員　少しシビアな言い方になるかもしれないが、学校のベースは「指導」である。教科指導、学習指導、部活動指導から、卒業後は「労働契約」になる。契約だから世界が変わることは当たり前。高校時代に頑張ったことがある生徒は、嫌なことがあっても踏ん張れる。教職員も世代交代がすすみ、例えば障害者雇用の現場や制度について知らない方もいる。また、地域の特徴を知ることも有用ではないか。地域のアセスメントという取組も出てきており、地域を分析するような視点が必要。教員という職を考えると、先生方は自分のやりたいことと、やりたかったことが仕事でリンクしていることが多い。だが世の中で自分のやりたいことを仕事にしている人がどれだけいるか。願いを実現できなかったときの切り分けや考え方をどう生徒に伝えるか。また、卒業後の実際の就労現場の実情の情報をどう自分に取り入れ、今の学校教育に結びつけていくか、そこがないと「いきなり」という考え方になってしまう。自分のやりたいことと、させてもらえること、そのギャップとどう向き合っていくか。その機会の１つが地域とのつながりや取組の中にある。先生方の意識に、「今はこの言動でよいが、卒業後、社会の中ではどうだろう」という切り替えが非常に重要になっ

てくる。オンラインでもよいので、そういったミニ学習会をやっていきましょう。働き続ける姿や、現場の実例はたくさん紹介できる。

・副校長　Ｂ委員のような外部の専門家をお招きして、教員だけでなく親子でも将来の生活を考える機会を計画している。是非、お願いしたい。

学びを積み重ね、失敗も経験し、自己肯定感を高める

・Ａ委員　３年間でどう学びを積み重ねていくかが、非常に大切である。地域に出ていくことも、失敗を感じることも必要。その一方で、特別支援学校に入学した生徒は自己肯定感が低いという側面もある。そこを育てていくことも先生方の大きな役割。もちろん地域の力も借りながら。

・教務課長　自己肯定感という言葉で考えると、生徒は４月と比べ大きく成長している。行事や、校内実習、地域作業をとおし、「自分はやらなくてもいいや」といった後ろ向きな姿勢から「やってみよう」という姿勢に変化している。それは授業態度や生活の中で度々感じられる。一方で更なる成長に必要なことの１つはＢ委員からあった、社会に出た時にはどうか、という視点であると思う。

・Ａ委員　３年間を計画的に考え、段階を踏んで関わっていけるとよい。それが計画通りにいかないところが難しさでもあり、醍醐味でもある。

・副校長　将来の生活へとつながる３年間の学びの道筋を授業で繰り返し指導しているが、現段階では生徒によって意識の差が大きい。

卒業後にワンクッションを置く考え方も必要

・Ｂ委員　特別支援学校になると、途端に 18 歳での就労という話になる。18 歳、20 歳前後は一番多感で悩む時期。もちろん分校のカリキュラムの中で一般就労を目指すこともいいが、ワンクッション置きタイミングを見計らうという考えも必要になってくる。自己肯定感がない中で、すぐに社会に出ることは難しい。そのあたりの見極めは、先生方、保護者本人でしていってほしい。

・Ａ委員　今後の富士東分校の方向性が垣間見えたように感じる。

・副校長　今後も生徒の成長を確認しながら取り組んでいく。また、リアルな実社会との接続という意識を持ち、１月の職場実習に向けて富士東分校の教育を見つめなおしていきたい。

＊第３回学校運営協議会は、令和６年１月 31 日（水）に開催の予定

令和５年度

第３回　富士特別支援学校富士東分校学校運営協議会（報告）

１　日　時　令和６年１月 31 日（水）　午前 10 時から正午まで

２　参加者

⑴　学校運営協議会委員（敬称略）

上村　一成（元特別支援学校長　現：教職員サポートルーム相談員）
鈴木　修　（特定非営利活動法人くらしえん・しごとえん　代表理事）
船津　裕子（船津クリニック　薬剤師）
佐野　勝　（青葉台地区町内会　連合会会長）
伊藤　直美（富士東高等学校　副校長）
髙橋　美喜（富　士　東　分　校　ＰＴＡ会長）

⑵　教職員

滝尾　彰彦（校　　長）
山﨑　勝之（副 校 長）
岩附　敦史（部 主 事）
杉澤　陵太（教務課長）

３　次　第

⑴　校長あいさつ

⑵　校内参観（VTR）

⑶　議事

ア　報告
・　２学期以降の取組
・　学校自己評価の報告
イ　協議、質疑応答
・「学校関係者評価」
・「評価結果等に基づく次年度の課題と取組について」
　　～どうする富士東分校 2024～

⑷　コンプライアンス委員会

ア　不祥事根絶に向けた取組について
・　経過、研修内容、時間外勤務等
イ　意見聴取

⑸　閉会あいさつ

【議事録】

１　校長あいさつ

富士東分校が開校して約 10 カ月、１年が経とうとしている。今日の学校運営協議会が、これまでの富士東分校の歩みを振り返るものになり、来年度以降の富士東分校を考える機会となってほしい。

富士東分校は新設校であり、生徒と教員が一緒になって創り上げている取組がたくさんある。また、富士東高校との間で、「共生・共育」の理念を具現化している取組もたくさんある。これらも含め今年度の評価をいただき、あわせて来年度に向けた意見をいただければと思う。本日はよろしくお願いします。

２　校内参観にかえてＶＴＲ視聴

【 代表生徒から報告 】

・東分校の良さってどんなところ？

「社会人に必要なことを分かりやすく学べる。友達と話題を共有できてコミュニケーションがとれる。一番の良さは、生徒の話を真剣に聞いてくれる先生たちがいる。」

・後輩に向けてメッセージを伝えるとすると

「自分の決めた進路に進むのが一番だと思う。もし富士東分校を選んだら富士東分校生が大歓迎する。高校生になる人を応援したい。」

・委員より生徒への質問

Q：「職場実習を体験して、今感じていることは」

A：「最初は自分にできるか、大丈夫かと心配だったけど、職場の人たちが温かいし仕事もやりがいがあるので恵まれているなと感じる。」

Q：「仕事内容は」

A：「やきそばの袋詰めや、商品のラベル貼り、梱包などをやっています。」

Q：「富士東分校の自慢は」

A：「いろいろあるけど、新しくできた富士東分校なのに青葉台地区の文化祭に、他の学校の生徒と一緒に参加できたことが一番の自慢です。」

Q：「もう少ししたら後輩が入って先輩になる、来年度がんばりたいことは」

A：「来年度、後輩の見本になるよう、先輩らしく振る舞える言葉遣いや社会に向けた心構えを意識していきたい。」

３　議事　【 ２学期以降の取組 】（高等部主事）

2学期以降の学部の取組について

良さを磨き	共に学び	社会で協働
●自立活動の指導を充実（セルフリフォーム） ・自己理解のためのチェックシートを活用 ・目標・課題別のグループ学習に取り組む **●芸術・表現活動の推進** ・美術作品の校外出展（地区文化祭、スターバックス富士高島展、富士市中央図書館） ・ボディパーカッション披露（地区文化祭） ・ハンドベル演奏 **●健全な心身の維持向上に向けた保健体育指導** ・養護教諭による保健指導（けがの防止と応急措置、感染症予防、ストレス対処法、人との関わり方、二次性徴　等） ・ストレッチ、呼吸法などを取り入れた朝のトレーニング ・ネット型スポーツ：テニピンの導入 **●キャリア発達に向けた職業教育の充実** ・キャリアパスポートの活用（進路の流れ、実習での自己の目標や振り返り） ・第2回校内実習（11 月：委託作業、余暇時間の過ごし方） ・第1回職場実習（1月：5日間）	**●富士東高校との共生・共育** **～高校生同士の言葉と空気感で～** **■行事等の交流** ・芸術鑑賞会への参加（狂言） ・球技大会（サッカー） ・2学期終業式（高校の終業式に分校生が参加。分校の生活を動画で紹介。） **■日常的な交流** ・昼の校内ラジオ放送「キラキラあわあ～」 ・部活動（サッカー部、剣道部、美術部） ・新聞部による取材 ・委員会活動（挨拶運動、募金活動） **■授業交流** ・東高の地理教諭による防災授業 ・食育講座（パッククッキング） ・クラフト班によるコサージュ製作 **●富士特（本校、富士宮分校）間での交流** **～互いに高め合う　SCRUM～** **■本校** ・作業製品の富士東校内に展示 **■宮分** ・Zoom での遠隔授業（職業） ・美術作品を富士東校内に展示 ・おすすめ図書の紹介	**●青葉台地区文化祭への参加（11 月）** ・ステージ部門の総合司会 ・ステージ発表（ボディパーカッション） ・製品販売（紙バンド製品） ・清掃活動（まちづくりセンターの窓磨き） ・作品展示 **●地域で働く機会の拡充** **■地域作業（4つの地域の企業等で実施）** ・ウエルシア富士木の宮店 ・富士きのこセンター ・デイサービスセンターふじみ台 ・東名電機株式会社 **■建設システムでの清掃・整備活動** **●外部人材を活用した学びの拡充** ・マリンスイーパーとのルアー再生事業の継続 ・日軽金オーリスによる清掃指導 ・地域の紙バンド製品作りのプロ（望月氏）によるマスクケース作りの指導 **●企業（事業所）向け学校見学会の実施（12 月）** ・23 事業所 43 名の方が富士東分校を見学。

【 学校自己評価 の報告】（ 副校長 ）

＜内　容＞

・教職員　学校自己評価
・保護者　学校評価
・生　徒　学校評価
・教職員　「こんな富士東分校にしたい」　（開校当初の想い）
・生　徒　「生徒も新しい学校創りに取り組む」（開校当初の想い）

【 協議、質疑応答 】（司会　A 委員）

＜学校関係者評価＞
・Ａ委員　副校長からの学校評価の説明を受け、目標具現化の柱である「守る」「育む」「つながる」の３つの観点からそれぞれの評価について考えていきたい。

「守る」：次年度は参加体験型の高校との合同防災訓練を

・Ｄ 委 員　学校評価の説明を受け、学校が評価したものを支持したい。ただ、なかなか実情がわからない中での学校関係者評価は難しい一面もある。

・Ａ 委 員　実際に学校に来て子どもたちの姿を見る、取組に直接触れるのは年３回の委員会となる。学校からの報告を受けながら、おやっと思うことや、もっとこうしたらいいのでは、そういった思いが反映されればいいと思う。気になるところ、補足したいところを挙げていきたい。

・Ｂ 委 員　学校評価の資料を全部読ませていただき、試行錯誤しながら学校経営をした結果が評価だと捉えている。大きな問題（人権や差別といった問題）があった場合、とことん議論や追求をしなければならないが、今年度はそうではない。学校の評価に賛同したい

・校　　長　評価に対するイメージに縛られずに、学校の取組にご意見をいただければありがたい。

・Ｅ 委 員　緊急時の取組について。９月の富士東高校との合同防災訓練が Zoom で行われた。事前の打ち合わせを詰めて、合同の良さを活かした対面での参加体験型学習を行えば、自分が取るべき対応につながる学習となったのではないだろうか。

・Ａ 委 員　生徒自身がどう対応していくかが重要になってくる。年始の能登地震について生徒たちはどう捉えていたか。自分事として捉えていたか、他人事なのか、分校の生徒の様子はどうたったか。

・教務課長　始業式の日、登校後すぐに「地震のニュース見た」と話題にする生徒が多かった。SHR で能登地震の話題をとりあげ、自分が感じたことや、もし家庭で発災した場合、どのように行動するかなどを話し合った。

・Ａ 委 員　タイムリーな話題を、タイムリーに伝えることが大切。特に命に関わるテーマについては。先生方の発想を柔軟にして取り組んでほしい。

「育む」：「なにかあるかも」と想像する姿勢を大切に

・Ｃ 委 員　開校当初の思いを生徒が振り返った評価項目を見ると「毎日学校に来たいと思える学校にしたい」「明るく元気な仲の良い学校にしたい」の評価が「Ｂ（ほぼできた）」であった。全体の評価を見て、みんな元気でいい状態だと捉えるのではなく、一人一人の意見を注視していってほしい。一人一人の子どもの中には何か思うものがある、何かあるかもしれない、と想像していく姿勢が大切だと思う。そこに落とし穴があるケースも多い。家庭の中で何かある子ほど、学校では隠すケースもある。例えば学級委員に立候補したとき、そこにアイデンティティを作ろうと自分で無理をしていることがある。これは特別支援学校の生徒だけではない。他人からの評価に自分を見出している。先生の立場で生徒を見る時は、「何かあるかもしれない」と常に思っているといいと思う。

・Ａ 委 員　つい、括りの中で見てしまうこともあるが、そうではないところに思いを寄せる姿勢が大事かもしれない。

・副 校 長　朝の段階で生徒に関する情報共有を行っているが、日々の変化はどうか。教務課長から説明願いたい。

・教務課長　教員はその日によって、生徒の表情、態度、声色の違いを感じとれる距離、関係でいる。朝の段階で気づいた時には、誰がどのようにアプローチしていくかを考えている。一方で、見えないところ、隠しているところについては、生徒の家庭環境や今置かれている状況なども考慮しながら様々な角度で見ていかなければならないと感じている。

・Ｂ 委 員　「かかわる力って何だろう」という問いがある。他にも信頼とか思いやりとか抽象的な言葉がある中で、表出される言語や行動の捉え方は多様である。そして、学校の中でかかわる力と、社会に出てからのかかわる力に違いがあるともいえる。学校時代の杓子定規な「こういし

ましょう」といったパターン化されたかかわり方が、社会に出てから本人を苦しめることもあるかもしれない。そういった視点で「かかわり方」を育んでいってほしい。

・Ａ 委 員　どうしても学校は一律に教えたくなる。その顕著な例がパターン化した行動。立派な挨拶や姿勢を見ても、自然にできているのか、そのパターンが本人にとって楽なのか、いろいろと想像しなければならない。そういった意味でも画一的な指導は行ってはならないと感じる。

・Ｆ 委 員　息子を含め、他の生徒もこの一年で自信ができたのが大きな成長だと感じる。実習初日は緊張していた。初めての環境に適応するのが苦手だったが、自分なりに適応しようと一生懸命にその場にいて、一生懸命人の話を聞こうとする姿勢があった。先生方のご協力のもとで、学校の中で守られているという環境から押し出された次の段階に入っていると感じている。この１年でこんなにもできるようになったと驚いている。先程、学級委員等の話題にあったが、息子は生徒会長に立候補した。見た目とは違い、実は内弁慶だった息子がなぜ立候補をしたか。それは自信を持てるようになりたかったから。また失敗があったからこそ、人前で話せるようになりたかったと教えてくれた。その時涙が出るほど嬉しかった。冗談ながら、ＰＴＡ会長、生徒会長と親子で頑張っていこうと話せたことが成長を感じた瞬間だった。ありがとうございます。

・Ａ 委 員　子ども自身が、自分を変えたくなってきている。それはすごい力。親の想像を超える可能性を発揮している。これからの成長が楽しみ。
生徒がこれだけ成長したのは、１年間でこれだけ多くの人と関わったことも要因として考えられる。その意味で青葉台地区の文化祭もきっかけとなったのではないか。

・Ｄ委員　東分校の生徒さんを思うと、やはり外部の方に触れるということがひとつのいい機会になるのではと思い文化祭へお誘いしようと思った。
その一方で生徒を不安にさせてはいないかと心配になることもあったが先生方や青葉台地区の役員との関係性の中で総合司会など、想像以上の関わりを持つことにつながった。これは自分自身の学校関係者評価に「Ａ」をつけたいほど。これから生徒が増えていく。もっともっと参加していただき、関係を深めていければと思う。我々にできることは地区との出会いである。地区としてもこれからも協力していきたい。富士東高校の吹奏楽部の皆さんにも大変感謝している。祭りで１番人が集まるのも吹奏楽部の演奏時である。

・副 校 長　学校外の方との触れ合いの効果については、地域作業を含め実感している。入学当初はどちらかというと富士東校生との関わりを強く求めていた生徒もいたが、分校生どうしで交わるうちに、身近な仲間が持つ良さを感じてとっていった。分校生 15 人のつながりが日を重ねる中で深まっている。今は仲間同士の気づきや、同級生からの指摘を受け入れる姿が多く見られる。そこに地域の力が加わることで、より成長が促されているという印象がある。

「つなげる」：高校生同士の言葉と高校生同士の空気感を大切に

・Ａ 委 員　VTR を見ながら、日常という言葉が非常に印象に残った。日常という言葉を使っても不自然ではない関係が富士東高校と富士東分校にあると思う。来年度の共有教室の運用についても可能性を感じる。今後、生徒同士が名前で呼び合えるような関係につながっていけば、更に自然なつながりが生まれていくのではないか。

・教務課長　１学期に比べ、富士東高校生とのかかわりや、校舎や授業時間を共有することを気にする姿が消え自然体になってきている。今後は日常的なかかわりを継続、発展させるためにも教員側がきっかけやアイデアを投げ、生徒なりに解釈し生徒が実践していく、そんな仕組みを作っていきたい。

・副 校 長　生徒同士のかかわりもそうであるが、両校の教員同士のかかわりも重要なポイントとしてあげられる。伊藤副校長をはじめ富士東高校のいろいろな先生が富士東分校の職員室や教室に来て話をしてくださる。清水校長は富士東分校生を名前で呼んであいさつをしてくださっている。それらが生徒の安心感につながっている。

・Ｂ 委 員　富士東分校の学校生活の様子と県内の他の分校のイメージに、良い意味で差異がある。どんな要因が考えられるか。

・副 校 長　これまでの分校整備では、設置する段階でフロアを分け、両校の独立性を保ちながら交流をしていくという手法がとられていた。富士東分校は、校舎も廊下も一続きでの配置となったが、そういった状況をうまく逆手にとり、交われるのなら交わっていこうという気持ちを職員が持ってスタートできた。受け入れる高校生も排他的ではなく、友好の目で見ていた。

・Ｅ 委 員　地続きのメリット、デメリットはある。デメリットをあげるとすれば日課が異なる日のチャイムなど。そうした不便さは生じてしまうが、それ以上にメリットが大きかった。

・Ｂ 委 員　こういった関係が、両校の生徒にとって将来良い方向に作用すると信じている。

・Ｆ 委 員　富士東高校の先生が SNS で富士東分校のことを発信してくださっている。それが拡散され、理解され、ＰＴＡ役員会の中でも他校の保護者から富士東分校の関わりが話題になることもある。開校当初は孤立的になるのではと心配もあったが、そんなことはなかった。第１回の学校運営協議会で提案した部活動への参加についても、剣道部の顧問の先生の尽力で社会教育団体として町道場が立ち上がり、参加できる仕組みが整った。息子も富士東高校に登校していると錯覚するほど自然に溶け込んでいる。富士東高校の生徒のテストや模試に臨む姿勢から刺激を受け、富士東分校や自分もできることをしっかりしなきゃとモチベーションにつながっている姿も見られる。共有できることとそうではないことがあるが、同世代の情報を知るということはとても大切な機会であると思う。そういった環境を作っている先生方のチームワークもありがたい。

・副 校 長　去年の開校準備段階から富士東高校の清水校長は、分校ができることを高校の売りにしたいとおっしゃっていた。もう一つ忘れてならないのが、共生・共育委員長の久保田さんの「高校生同士の言葉で、高校生同士の空気感で」という投げかけが、スタート時点であったこと。これまでの共生・共育は行事中心で、それが負担感となっている場合もあったが、ここでの共生・共育はいい意味で流動的で教員は後方支援に回れた。生徒には、やらされているのではなく、自分たちがやっているという感覚がある。ただ、推進力がなくなった時や動き出しが難しい時には、教員のフォローが必要になってくる。

・Ａ 委 員　やらされるのではなく、自分たちがやっているという感覚が良い。そして、これからが大切、スタートはうまくいった、交流が日常になればなるほど大切なものを忘れがちになる。この雰囲気を続けていくことと、教員側のさりげない支援を行ってほしい。

【 評価結果に基づく次年度の課題と取組について 】

・Ｃ 委 員　初めてのことでどういうものかと思いながら参加していた。学校の取組を知り、動画を見て感動し、私自身の勉強になることも多かった。非常に良いスタートを切ったと思う。これをいかに継続していくかが大変だと思う。これから人数も増えていく。今の人数だからできたということもある。何か問題があった時にこそ、探るチャンスがあると常々思っている。富士東分校と関わりながら自分にできることを行っていきたい。よろしくお願いします。

・Ｄ 委 員　生徒の話を聞く中で自分の高校時代を思い出した。私は高校卒業後、即社会人になった。学校の教育は当然必要だが、外部の方との接触も非常に大事だと思う。社会勉強は人生の中で活かされる場面が多い。富士東分校のこの１年間の経験を活かし、是非、来年も維持できるようにしていってほしい。私自身、分校との間に入り、より一層青葉台地区とのつながりを持てるようにしていきたい。地域に飛び込んできてほしい。

・Ｆ 委 員　息子をはじめ、分校生徒全員が先生方に感謝している。今後もいろいろなことにチャレンジして、できないのではなくできる環境作りに尽力していってほしい。私もできることがあれば協力していきたい。

・Ｅ 委 員　同じひとつ屋根の下に２つの学校がある、違う校種の先生方と共に仕事をすることに刺激を受けた１年だった。はっとさせられたり、身が引き締まる思いになったりすることもあった。生徒同士も同じことを感じた１年だったのではないかと思う。そういう良さを感じながら１年間を振り返ることができるのは、幸せなこと。良いスタートを切れたことを維持していくのが大事。構成員が変わっていく中でどうしたら今を維持していけるかが肝心で課題になっていく。引き続きよろしくお願いします。

・Ｂ 委 員　昨日、東京の特例子会社の現場でセッションがあった。来週は同じく東京（第一生命の特例子会社）で現場視察がある。今、障害者が働く現場でのキーワードは共生社会、インクルージョンをどう考えるか、ということだと感じている。そこでこの富士東分校と富士東高校の関係性の中で出てきている、様々な芽生えや変化と、10 年以上障害者雇用の現場で働いてきている彼らとを、どのように結びつけていけば良いかと考えさせられている。現実社会には難しいことや理不尽なこともたくさんある中で、今、非常に良い形で成長している彼らがいる。一方で障害者雇用率の上昇に合わせて障害者雇用代行ビジネスというものも実際にある。そういった状況の中で共生をどのように実現していくか。ここでできた地域とのつながりが、どのように将来の社会につながっていくのか。是非、この学校内のつながりを大切にし、定着させていってほしい。そして地域の役割の意味を考え、こちらもつながりを継続していってほしい。今後に期待し、応援していきたい。

・Ａ 委 員　生徒の表情が最初の頃よりも本当に変わっていって、子ども達は１年でこんなに成長するんだと実感している。思春期、青年期の子どもたちの成長は私たちの成長をこえるものがあると改めて感じた。そこを支えるのは大人。教員を含めて地域の方々が、子ども達をしっかりと見守っていたのだと思う。自然に支える工夫を実践していたのは先生方がいたからであり、改めて富士東分校は楽しいが溢れる良い学校だと実感している。来年は生徒も増え、後輩・先輩の関係性ができる。それぞれの成長や絆を大切にしていってほしい。